# のきさきから始まるまちづくり

福島県会津若松市　アネッサクラブ

明治時代の洋装に身を包んだ麗人、山高帽の紳士、薙刀を持った白装束姿の武家娘、お姫様に扮した女性たちが磐越西線会津若松駅ホームで乗客を出迎えた。「きょうは、はいからさんになりきって、自分なりのパフォーマンスでお客さんを迎えて！」と山崎捷子さんの声が飛ぶ。アネッサクラブでは「はいからさん」という言葉に特別の意味を込めている。時代をリードし、改革をしていく人たち。それが「はいからさん」。

洋装に身を包んだ麗人は大山捨松。幕末の会津藩家老の家の娘として生を受け、十二歳で初の官費女子留学生として渡米。このとき、母親は旅立つ娘に「捨てたつもりで待つ」との思いを込め「捨松」と改名。十年後に帰国。のちに明治の元勲となる大山巌と結婚、鹿鳴館の華と謳われ、津田英語塾の創設や日本初の看護婦学校の設立に尽力した。山高帽の紳士は会津藩士を父に持つ松江豊寿。第一次世界大戦中、徳島県の坂東捕虜収容所所長となり、収容されたドイツ兵捕虜に対し「捕虜は犯罪者ではない。人道的に扱うべき」を実践した。このとき捕虜たちにより第九が演奏された。この逸話は小説や映画の題材として取り上げられつとに名高い。

会津にはこのほかにも幾多の「はいからさん」を輩出した。高い志と情熱を持った生き方をした会津出身の先達の魂に触れ、明るく

勇気あるはいからさんになりたい。そして自分の店づくり、街づくりをすすめたい。そんな願いからアネッサクラブは、会津若松市大町大通りとその周辺商店街のおかみさんたちによって結成された。アネッサとは商家のおかみさんを「あねさま」と呼ぶところからきている。

最初に取り組んだのが「のきさきギャラリー」。メンバーの多くが商いを営む大町大通りは、会津若松駅から南に伸びる一・五キロの商店街。およそ四百年前、蒲生氏郷がこの地に来て最初に作ったといわれる商人の街。歴史のある街だけに、商店の蔵には民芸品や調度品が数多く保管されている。こんな家々のお宝を自分たちの店先の一角に飾ることから始めた。二月、三月はひな祭り、五月は、端午の節句と季節ごとにテーマを設け飾っていった。そのなかから、道行く人たちとのふれあいを持ち、楽しい街並みづくりを目指した。もう一つが、『いすをどうぞ』『トイレをどうぞ』『お茶をどうぞ』『お荷物をどうぞ』の「四つのどうぞ」。街を散策するときに欠かせないことばかり。個々の店では、店先にイスを出したり、お茶でもてなしたりすることはこれまでも、すでにしていたこと。これを標語として、シンボルマークをつくり、打ち出したことにより、はっきりとお客様に伝わっていったことが大きいという。さらに、手づ

くりのガイドマップの作成、イベント「はいからさんに逢えるまち」の開催、アネッサ大学の開催など活動は多岐に広がっていった。

もちろん活動は平坦ではなかった。いまでこそ活動が男性陣や行政に認められるようになったが、「最初はなかなか公認の会と認めてもらえなった」と二代目会長の山崎さんは述懐する。そもそも女性が店のことに、社会に向けて発信することがはばかれるといった雰囲気もあったという。行政とも何度も掛け合ったとの発言に、その苦労が偲ばれる。

今年で、アネッサクラブは十周年を迎えた。設立十週記念事業として、江戸時代この通りが五街道の基点で「札の辻」だったことから、人びとと物が交流する市、アネッサ十日市も開かれた。新潟県十日町市川西町商工会の「あねさ」たちがお酒などの物産を販売したのをはじめ、これまで活動のなかで交流の生まれた二十団体ほどが出店、多くのお客さんでにぎわった。また、駅ホームで乗客を出迎えた大山捨松さんたちは、その後大町通りをパレードし、自らの生涯を語り、その生き方を新しい「語り部」としてアピールした。はいからさんをめざしてアネッサクラブの面々の活動はこれからも続く。

■連絡先

アネッサクラブ代表　小野寺裕子

http://www.anessa-club.jp/about.html

会津特産品
おみやげ
上
手打そば